

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年8月8日(土)

### 《悪魔の誘惑に負けないように、いつも意識しましょう》

ある信心深いおじさんが、山の祭壇に生贄を捧げようと思いました。そして、1匹の羊の足をひもで縛り、肩に背負って、山に登り始めました。ところが、その羊を手に入れたいと思っている3人の人が、山に登るおじさんの姿を見ていました。彼らは、どうすればその羊を奪うことができるか話し合います。そして、まずその中の一人が、おじさんに話しかけます。「おじさん、なぜ生贄するために汚い犬を背負って登っているのですか？」それを聞いたおじさんは「何の話しをしているのか？私は今、一番大事にしていた羊を持って登って行くところなのに、邪魔をしないで欲しい。」と言い、そのまま先へ進もうとします。そこへ二番目の人がやってきて、「何の話しをしているのですか？それは汚い犬でしょう。なぜ犬を見て‘羊’‘羊’と言っているのですか？」と言います。そして二人が言ってしまうと、そのおじさんはもう一度「何の話だ！」と叫びます。すると三番目の人がやってきて「二人の言葉が正しいですよ。おじさん、汚い犬を捨てて、ちゃんとした羊を持って行ってください。」と言います。

三人から言われると、このおじさんは「私が間違えているのだろうか？」と思い始めました。そして、きれいな羊が汚い犬に見え始めました。とうとう彼は、「私は今、ぼけているのだろうか。」と言いながら、羊を下ろして、その人たちに渡します。そして別の羊を求めに帰ります。

簡単な作り話なのですが、信仰というのはこのようなものではないかと思えます。間違えた信仰というのは、何人かの人から、「ですよ」と言われてしまうと、「だ」と思っていたのに、「やはりが正しいのだろうか」とすぐに耳を傾けてしまいます。それが私たちの弱さです。実際に教会の歴史を振り返ってみても、学者やいろいろな人々によって、信仰的、神学的に縛られてしまい、教会が間違えた道を歩んだことが結構あります。

皆様は、神様を信じていますよね。それならば、逆に悪魔が存在することも認めるのが正しい心です。悪魔は人間より力を持っています。ものすごく賢くて、アインシュタインの頭でも絶対負かせないくらいの知能を持っています。そのような悪魔達が、神様のみ旨がきれいに、順調に、素直に、成し遂げられるのを黙って放って置くはずはありません。必ずいたずらをします。そのいたずらの対象は、やはりカトリック信者である私たちです。あの手この手でその人たちを誘い、自分の気に入る道を歩ませたいのが悪魔の心でしょう。それが、悪魔が神様に逆らう唯一の方法なのでしょう。悪魔もものすごく頑張っているのです。だから、だまされたり倒れたりする信者達も結構いるのが現実です。

実際に洗礼を受けてすぐ、よくない本を読んだり、他の人の話を聞いたりしたことで、カトリックの教会を離れる人も少なくはありません。

皆様、私たちの信仰は、このように容易に手に入るものではないことを意識しましょう。ある程度、健康的な緊張感の中で、自分との戦い、教会の正しい導きや教えに従おうとする努力がなければ、私たちは本当に倒れてしまいます。ですから、いつも祈りながら、時には、この祈りそのものが正しい祈りかどうか考えながら、正しい信仰を求めなければなりません。私たちには、そのための宝物があります。それは2000年間という教会の歴史です。いろいろな問題の乗り越えを体験してきた教会の教えです。それは、少なくとも客観的な教えです。偏見のある教えではありません。その教会の教え、掟や法律にさえ必ず意味があります。その意味を理解しようと努力することが何よりも必要です。

ですから信者である私たちには、一つの義務がついてきます。それは勉強することです。教会が薦める本を読もうとする努力、神様の恵みによって特別なタレントやカリスマ、癒しの力、言葉の力をもらっている人々がいれば、接して何かを学ぼうとする努力、信仰深い隣の人々の祈る姿になぜその

ように信仰深くなったのかを気にする心さえ、私たちには必要ではないかと思えます。

皆様、自分の信仰に自信を持つためにはものすごく時間と努力が必要です。そのような自信がつくまで、いろいろな悪魔のいたずらがあることをよく覚えておいてください。特に、洗礼を受けたばかりの方には誘惑が大きく近づいてきます。洗礼を受ける前よりもっと自分の生活が滅茶苦茶になるかもしれません。私たちの一番弱いところに触れよう、さわろうとするのが、悪魔の上手なやり方です。そういうことに負けないように、そして、皆様が洗礼を受けるときに、「私は、悪魔の力を退けます。イエス・キリストを神様の御一人子として信じます。」と言った心を思い出しながら、毎日自分との戦いを続けなければならないのではないかと思えます。

皆様、私たちは、いつも誘惑の内にあります。それを忘れないでください。

ありがとうございました。